

原著

非対面で看護学概論を受講した学生の看護観と 看護観形成に影響した講義内容

Philosophy of Nursing of Students who took “Introduction to Nursing” in a Non-Face-to-Face Setting and the Lecture Content that Influenced the Formation of that Philosophy

丹下めぐみ¹⁾ 山口大輔¹⁾ 上原文恵¹⁾ 小林千世¹⁾
Megumi Tange Daisuke Yamaguchi Fumie Uehara Chise Kobayashi

キーワード：看護大学生、看護観、テキストマイニング、非対面、教育手法

Key words: Nursing students, Philosophy of nursing, Text mining, Non-face-to-face,
Education method

要旨

本研究は、非対面で看護学概論を受講した看護基礎教育初年度の学生が形成した看護観と、看護観の形成に影響した講義の内容を明らかにした。学生69名のデータをテキストマイニングで分析した結果、看護観は【患者と家族に寄り添い医療・看護を提供する】【患者と家族の不安を和らげ信頼関係を構築する】【正確な知識・技術を身につけ患者の安心に繋げる】【生活に合わせた健康・回復へのサポート】【行動に常に責任を持つ】【的確な観察と対応】【少しの変化に気づき必要な看護を提供する】【相手の立場を理解し看護を実践する】の8つが抽出された。影響をうけた講義の内容は、教員の臨床体験動画、看護倫理や看護の法制度など専門的な知識の学習であった。特に教員の臨床体験は、修得した知識やスキルを維持し続けることの重要性や患者主体の看護を強く認識していることがうかがえた。

I. 研究の背景

看護観は、それぞれの看護者が行う看護として表現され、個人の中に取り入れられた看護における価値観、規範、態度、行動を内面化し個人の中で価値づけられたものである。すなわち、看護の学習や体験を通じて形成された価値観といえる(長谷川ら、2015)。

看護学生が形成する看護観についての先行研究では、初年次の学生を対象とし入学時から初めての病院見学実習後までに形成された看護観を分析している(木村・三上、2018)。入学時の看護観は【医師の補助】【患者の身の回りの世話】【患者に寄

り添う】であり、授業や実習を経験することで【患者に寄り添う】ことは【家族にも寄り添う看護】へと変化したことや【退院後を見据えた生活援助】といった先を見据えた看護観の出現について報告していた。その他、入学直後の看護学生は患者の精神面に配慮した看護役割への認識は弱い、授業における学びを通して強くなっていく可能性が報告されている(小野・二重作・古庄・能登・永田、2013)。これらの研究から、学内での専門的な講義や臨地実習等の経験が自らの看護観の育成に影響していることは明らかと言える。

看護学生が入学直後より学ぶ専門的な科目の一

1) 信州大学医学部保健学科 School of Health Sciences, Shinshu University School of Medicine

つに看護学概論がある。看護学概論では、看護の基本的事項をはじめ看護倫理・理論について学ぶ。看護学の本質の理解や看護学への関心を高め学習意欲を鼓舞させるための科目であり(志自岐・松尾・習田・金、2017)、学生はこういった学習を通して教員や友人と関わりながら看護について関心を持ち、自身の看護観の形成につながる機会を得ると考えられる。

また、学生が学習を進めるうえで対面授業は教員や周りの学生とのコミュニケーションがとりやすい学習形態である(鳥越・小湊・望月・青木、2021)との報告があり、他者と関わりながら行われる対面授業は看護観の形成にとって重要な役割を果たしてきたと考えられる。

しかしながら、2020年新型コロナウイルス感染症の感染予防対策のため多くの大学は対面授業が実施できない状況となり、本学も非対面で授業を開始することとなった。これにより入学直後の学生は、看護基礎教育を初めて受けるにもかかわらず他者との関わりやコミュニケーションを取る機会が少なく、対面授業の恩恵が得られにくい環境におかれた。人と関わる体験は、コミュニケーション能力の向上と豊かな人間性を創り出し看護職としての資質を培うことにつながる(伊丹ら、2008)ともいわれており、学生にとって他者と関わる経験が減ることは看護観の形成に影響を与えると考えられる。

そこで本研究は、看護基礎教育初年度の学生が従来と異なる学習環境の中でどのような看護観が形成されたのかを明らかにしたいと考えた。

本研究の意義は、非対面で授業をうけた学生の看護観を明らかにすることで新たな授業形態での教育的支援に寄与することが期待される。

II. 研究目的

非対面で看護学概論を受講した看護基礎教育初年度の学生が形成した看護観と、看護観の形成に影響した講義の内容を明らかにする。

III. 研究方法

1. 学生が非対面で受講した看護学概論の概要

1年次前期に開講し、看護学概論Ⅰ(1単位30時間)Ⅱ(1単位15時間)で構成されている。2020年度は学内 e-Learning システムを用いた非対面授業を行い、システム上にアップした動画や資料を閲覧することで授業を進めた。また、講義内容に合わせ学生を数名ずつのグループに振り分け、その中でコミュニケーションがとれるようにメール、Google ドキュメント、スプレッドシートなどを活用した。講義資料は音声付き PowerPoint ファイルで提示し、指定の時間内に受講のうえ各受講後の振り返りレポートを提出するよう求めた。レポートは5名の教員が分担して確認し、各学生にシステム内のメールでフィードバックしながら学習状況の把握と教員間での情報共有を行った。授業スケジュールを表1に示す。

表1 看護学概論ⅠⅡの授業スケジュール

回	内容
看護学概論Ⅰ *3回~15回まで音声ファイルを受講	
1 課題	自分の知る看護についてまとめる
2 課題	看護はいつから看護か、いつ医療システムになったのかまとめる
3	看護学概論で学ぶこと/看護とは何か
4	看護の概念・定義・目的
5	看護とケア/ケアリング
6	看護職/看護・支援・介護
7	看護実践に必要な4つの概念:看護・人間・健康・環境
8	看護の対象を理解する
9	看護実践の場・保健医療システム
10	看護と法律
11	看護実践としての看護とは
12	医療機関における看護/看護とは何か
13	看護の目的:自立・安楽・安全/治療の支援
14	看護過程
15	看護の実践を表現する/記録
16	筆記試験
看護学概論Ⅱ *1回~5回まで音声ファイルを受講	
1	看護はどのように実践されるのか
2	看護の体制/チーム医療
3	看護と倫理
4	看護学とは/看護研究とは
5	看護理論/看護はどのように説明されているのか
6	教員3名の臨床経験について動画を視聴 最終課題レポート 課題テーマの提示
7	筆記試験
8	看護学概論Ⅰ・Ⅱ 授業評価アンケート

2. 研究対象

研究参加が得られた A 大学 1 年生 69 名の提出

した最終課題レポートの個人情報が含まれないテキストデータ。

3. 調査期間

2020 年 12 月～2021 年 3 月

4. 収集方法

看護学概論Ⅱ第 6 回講義にて、課題テーマ「現在の看護観」「看護観に影響を受けたこと」を提示した。文字制限は A4 サイズ 2 枚以内、期日は受講後 1 週間とし本学の e-Learning システムへ提出を求めた。提出されたテキストのうち、個人情報が含まれている箇所を除きシステム内からダウンロードした。

5. 分析方法

最終課題レポートのテキストデータをテキストマイニングの手法を用い分析した。テキストデータを計量的に分析し、結果を客観的に概観できるためこの手法を用いた。分析ソフトは KH Coder³ を使用し、結果の視覚化と抽出された言葉から原文解釈を繰り返して分析を深めた（樋口、2020）。分析は、以下の 4 つのステップで行った。

1) 分析精度を高めるための分析前準備

- (1) 表記の統一：複数の書き方や読み方がある語の統一。例「ナースと看護師」「医師と医者」
- (2) 語の強制抽出：専門用語や複合語を正しく抽出するため、ソフト内の機能を使用し「看護学概論」「看護観」「看護倫理」「看護理論」「看護過程」を認識させた。
- (3) 分析除外語の設定：課題テーマに用いた「看護観」や科目名である「看護学概論」は必然的に言葉が増えるため分析対象外とした。

2) 抽出語のリスト化

初期段階で抽出した頻出語上位 150 語からデータの全体像を探った。その中でも特に出現頻度の高い 50 語に注目しリスト化した。

3) 共起ネットワーク分析

語句間の関連性を分析し可視化するため、課題テーマごとに共起ネットワーク図を作成した。

- (1) 「現在の看護観」：共起性の強い語と語を結びグループを形成する“サブグラフ検出 modularity”を作成した。円の大きさは出現回数と比例し、共起性の強さは線の太さで示され弱いものは破線で結ばれる。また、抽出語同士の間連の強さを Jaccard 係数により確認した。Jaccard 係数は語句間の共起性の程度を表す指標の一つであり KH Coder の分析では多く用いられている（表 2）（末吉、2020）。

表 2 Jaccard 係数 参考基準

「0.1」→「関連がある」
「0.2」→「強い関連がある」
「0.3」→「とても強い関連がある」

- (2) 「看護観に影響を受けたこと」：共起ネットワーク構造内で影響力が大きく中心的な役割を担う語が確認できる“媒介中心性”を作成した。描画された円の濃淡（白～濃灰色）により、濃いものがネットワークでの中心性を示す。
- (3) 「影響」に関連の強い語を関連語検索で抽出し、関連語による共起ネットワークを作成した。
- 4) Key words in Context 機能（以下 KWIC）

すべての抽出語を KWIC で確認した。KWIC は抽出語がデータ内でどのように用いられていたのかという文脈を探り、内容や意味の解釈に繋がられる。共起ネットワーク「現在の看護観」で形成された各グループには、KWIC で特徴を把握しネーミングを行った。

6. 倫理的配慮

研究者が担当する講義に先立って、研究の趣旨、方法、結果の公表、個人情報の保護、研究参加の任意性、参加の有無が成績評価に影響せず不利益はないことについて、学生に対し口頭と文書にて説明した。文書は e-Learning に公開し、研究参加を希望しない場合の意思表示ができる窓口（連絡先）を明示した。説明後、研究不参加の申し出期間を 1 か月設け、申し出期間を過ぎてから不参加の意思表示がないものを研究参加への同意とみなしてデータを収集した。尚、本研究は信州大学医学部医倫理委員会の承認を得た（承認番号 4959）。

IV. 結果

1. 抽出語句：「現在の看護観」

ダウンロードされたテキストデータの文章数を単純集計した結果、総文章数は 596 であった。総抽出語数（対象データに含まれる全ての語数）は 7,645 であり、異なり語数（含まれている語の種類）は 1,318 であった。頻出語上位 50 語と出現回数を表 3 に示す。

表 3 頻出語上位 50 語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
患者	543	生活	44	今	26
看護	255	コミュニケーション	43	自身	26
看護師	167	医療	43	対応	26
思う	160	気持ち	38	立場	26
考える	145	健康	38	変化	25
自分	97	持つ	38	技術	24
家族	88	不安	36	提供	24
大切	83	現在	32	ケア	23
人	73	治療	31	サポート	22
信頼	66	行動	30	環境	21
関係	63	重要	30	実践	21
寄り添う	63	築く	29	少し	21
行う	54	理解	29	常に	21
必要	52	病気	28	観察	20
学ぶ	50	安心	27	関わる	19
感じる	50	心	27	経験	19
知識	45	回復	26		

2. 共起ネットワーク：「現在の看護観」

共起ネットワーク（サブグラフ検出 modularity）を作成した結果 8 つのグループが形成された（図 1）。各グループの抽出語を KWIC で確認しグループ名をネーミングした。以下、【】はグループ名を示す。KWIC の代表的な例を表 4 に示す。

- 1) 【患者と家族に寄り添い医療・看護を提供する】
グループ①は「患者」「看護」「看護師」「思う」「寄り添う」「行う」「感じる」「医療」「気持ち」「心」「今」「提供」「ケア」で構成された。KWIC では、「看護師」は「患者」を一人の人として理解すること、「患者」と家族に「寄り添い」心も体も健康にするなどが記述されており【患者と家族に寄り添い医療・看護を提供する】ことについて表されていた。
- 2) 【患者と家族の不安を和らげ信頼関係を構築する】
グループ②は「家族」「信頼」「関係」「コミュニケーション」「不安」「築く」「病院」で構成された。

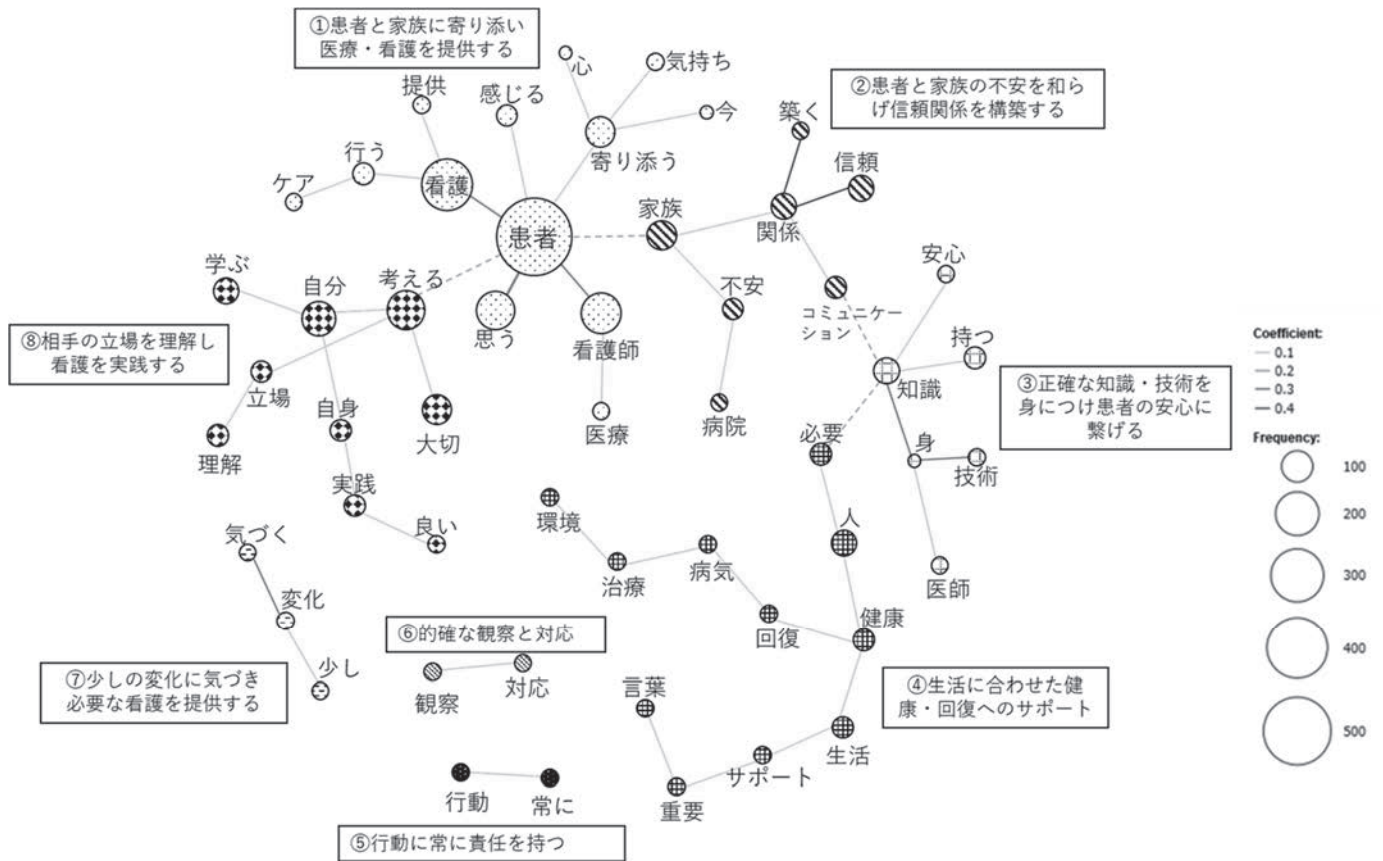


図 1 「現在の看護観」共起ネットワーク（サブグラフ検出 modularity）

KWIC では、患者や家族とも「信頼」「関係」を「築き（く）」「家族」の思いや「不安」に寄り添うこと、患者の背景を知ること、「家族」とのコミュニケーションは欠かせないなどが記述されており【患者と家族の不安を和らげ信頼関係を構築することについて表されていた。

当該グループに含まれる抽出語の Jaccard 係数は『関係—築く 0.46』『関係—信頼 0.47』と 0.3 以上であり、とても強い関連が示された。

3) 【正確な知識・技術を身につけ患者の安心に繋げる】

グループ③は「知識」「持つ」「安心」「技術」「医師」「身」で構成された。KWIC では、安全な看護を提供するためには正確な「知識」と「技術」を「身」

に付けている必要があること、自分に自信を「持つて（つ）」看護することが患者を「安心」させるなどが記述されており【正確な知識・技術を身につけ患者の安心に繋げる】ことについて表されていた。

4) 【生活に合わせた健康・回復へのサポート】

グループ④は「人」「必要」「生活」「健康」「治療」「重要」「病気」「回復」「サポート」「環境」「言葉」で構成された。KWIC では、もとの「生活」により近い環境で看護を提供することが早期「回復」への第一歩だと考えること、再びその「人」らしく「健康」に暮らせることを目指し支援したいなどが記述されており【生活に合わせた健康・回復へのサポート】について表されていた。

表 4 共起ネットワーク各グループの記述内容例

グループ	抽出語	記述内容の例
①【患者と家族に寄り添い医療・看護を提供する】	患者, 看護, 看護師, 思う, 寄り添う, 行う, 感じる, 医療, 気持ち, 心, 今, 提供, ケア	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師は患者を1人の人として理解することが必要。 ・患者と家族の気持ちに寄り添い、心も体も健康にする。 ・患者のニーズに合わせて看護や医療を提供することが大切。 ・患者や家族が入院中に感じる不安や不満を少しでも減らしたい。 ・患者だけでなく患者の家族にも寄り添うことが看護には不可欠だとわかった。
②【患者と家族の不安を和らげ信頼関係を構築する】	家族, 信頼, 関係, コミュニケーション, 不安, 築く, 病院	<ul style="list-style-type: none"> ・患者と家族とも信頼関係を築き家族の思いや不安に寄り添う。 ・患者の背景を知ることや家族とのコミュニケーションは欠かせない。 ・患者主体の生活背景に基づいた看護を提供し、患者と家族が安心できるようにしたい。 ・患者・家族・医師の架け橋となることが必要。 ・患者と家族とも信頼関係を築き家族の思いや不安に寄り添う。
③【正確な知識・技術を身につけ患者の安心に繋げる】	知識, 持つ, 安心, 技術, 医師, 身	<ul style="list-style-type: none"> ・常に学び続ける姿勢を持つことが大切。 ・安全な看護を提供するためには正確な知識と技術を身につけている必要がある。 ・自分に自信をもって看護することが患者を安心させる。 ・常に学び続け既存の知識や技術に加え先進的な知識や技術も身に付ける必要がある。 ・医師が行う治療を理解し患者の状態を正確に伝えられるようになりたい。
④【生活に合わせた健康・回復へのサポート】	人, 必要, 生活, 健康, 治療, 重要, 病気, 回復, サポート, 環境, 言葉	<ul style="list-style-type: none"> ・もとの生活により近い環境で看護を提供することが早期回復への第一歩だと考える。 ・再びその人らしく健康に暮らせることを目指し支援したい。 ・患者主体の生活背景に基づいた看護を提供し患者と家族が安心できるサポートをする。 ・患者の言葉に耳を傾けよく聞き回復能力を最大限に引き出す。 ・自分らしく生きることや自立することをサポートする。
⑤【行動に常に責任を持つ】	行動, 常に	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の行動に常に責任を持つ。 ・急変や緊急事態に冷静に行動したい。 ・相手の心やニーズを考えた行動ができるようになりたい。 ・普段から発言や行動に責任を持ち臨機応変に考え行動する能力を養いたい。
⑥【的確な観察と対応】	対応, 観察	<ul style="list-style-type: none"> ・患者が示してくれる反応を見落とさないように観察する力を磨きたい。 ・異変に気づける観察力や病態の変化に対応できる知識と技術を持ちたい。 ・日頃から患者の様子や周囲の環境を注意深く観察し把握することが大切。 ・わずかな兆候から重大な変化を読み取るためによく観察する。
⑦【少しの変化に気づき必要な看護を提供する】	変化, 少し, 気づく	<ul style="list-style-type: none"> ・患者のニーズに変化があった場合はアセスメントを再構築し常に必要な援助を行う。 ・患者との会話で変化に気づくことはもちろん言葉だけでなく本心にも気づく。 ・患者だけでなく家族にも目を向け笑顔で相手の立場になり患者の些細な変化に気づく。 ・患者の小さな変化を見逃さず家族にも何が出来るかを考えたい。
⑧【相手の立場を理解し看護を実践する】	考える, 自分, 大切, 学ぶ, 理解, 自身, 立場, 実践, 良い	<ul style="list-style-type: none"> ・患者の立場に立って考えられているのかを振り返りながら行動していきたい。 ・患者の個性を理解し患者にあった方法で自分の看護のやり方を変えていきたい。 ・対等な関係を保った看護を実践していきたい。 ・一律なケアでなく患者それぞれの価値観を理解し尊重することが必要。

5) 【行動に常に責任を持つ】

グループ⑤は「行動」「常に」で構成された。KWICでは、自分の「行動」に「常に」責任を持つこと、急変や緊急事態に冷静に「行動」したいなどが記述されており【行動に常に責任を持つ】ことについて表されていた。

6) 【的確な観察と対応】

グループ⑥は「対応」「観察」で構成された。KWICでは、患者が示してくれる反応を見落とさないように「観察」する力を磨きたい、異変に気づける「観察」力や病態の変化に対応できる知識と技術を持ちたいなどが記述されており【的確な観察と対応】について表されていた。

7) 【少しの変化に気づき必要な看護を提供する】

グループ⑦は「変化」「少し」「気づく」で構成された。KWICでは、患者のニーズに「変化」があった場合はアセスメントを再構築し常に必要な援助を行うこと、患者との会話で変化に気づくことはもちろん、言葉だけでない本心にも「気づく」などが記述されており【少しの変化に気づき必要な看護を提供する】ことについて表されていた。

当該グループに含まれる抽出語の Jaccard 係数は『変化—気づく 0.32』であり、とても強い関連が示された。

8) 【相手の立場を理解し看護を実践する】

グループ⑧は「考える」「自分」「大切」「学ぶ」「理解」「自身」「立場」「実践」「良い」で構成された。KWICでは、患者の「立場」に立って「考える」ことができているのかを振り返りながら行動し

ていきたい、患者の個性を「理解」し患者にあった方法で「自分」の看護のやり方を変えていきたいなどが記述されており【相手の立場を理解し看護を実践する】ことについて表されていた。

3. 抽出語句：「看護観に影響を受けたこと」

総文章数は 877、総抽出語数は 11,244、異なり語数は 1,735 であった。頻出語上位 50 語と出現回数を表 5 に示す。

4. 共起ネットワーク媒介中心性：「看護観に影響を受けたこと」

共起ネットワーク媒介中心性を作成した結果「先生」「お話」「スキル」「患者」の抽出語の円が最も濃く描画されており、中心性が高いことを示していた(図 2)。KWICでは「先生」の「お話」から修得した「スキル」や知識は維持し続けることが大切だと知ったこと、「患者」主体の看護が大切であるといった内容が記述されていた。

5. 共起ネットワーク：関連語検索「影響」

「影響」と関連が強い語の共起ネットワークは 5 つのグループが形成された(図 3)。

グループ 01 は「影響」を中心に「与える」「考え」「看護」「受ける」「考え方」「非常」「コミュニケーション」「大事」「実践」で構成された。KWICでは、4 月は患者のことだけを「考え」ていたが講義や先生の臨床体験を聞き「影響」を「受け」変化したこと、入学前は「看護」を「実践」的な医療の面でしか「考え」ることができなかったが歴史や法律などの細かい知識を学ぶことで大きく見方が変わったといった内容が記述されていた。

グループ 02 は「先生」「臨床」「経験」「大きい」「家族」「対象」「お話」「知識」「スキル」「得る」「自身」「学習」「一つ」「関係」「述べる」「良い」「声」「急変」「体験」で構成された。KWICでは、「先生」の「お話」から「自身」が「得た」「知識」や「スキル」を維持して持ち続けることが必要とわかり影響を受けたこと、「先生」の臨床「体験」動画で看護師主体ではなく患者主体という言葉が

表 5 頻出語上位 50 語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
患者	519	持つ	62	臨床	38
看護	337	重要	58	変化	37
看護師	211	必要	58	考え方	36
思う	176	経験	57	病気	36
考える	170	知る	54	受ける	35
自分	157	与える	53	気持ち	34
学ぶ	146	健康	50	回復	32
先生	127	生活	47	寄り添う	32
感じる	109	お話	46	看護過程	31
大切	98	不安	46	ケア	30
人	88	今	45	行動	29
家族	80	医療	44	出来る	29
考え	76	環境	43	理解	29
知識	69	言葉	43	コミュニケーション	28
影響	66	話	43	治療	28
聞く	66	対応	42	スキル	27
行う	63	心	39		

近)な「事例」で学ぶ「看護倫理」で患者をまるごとの人間として理解し、そのニーズへの答えかたは看護師のもつ敏感さや洞察力にかかっていると学んだこと、「ナイチンゲール」「ヘンダーソン」の考えを知ったことは新たな視点から看護を考える機会を得たといった記述があった。

グループ04は「様々」「看護理論」で構成されており、KWICでは「様々」な看護モデル「看護理論」を知ることによって看護を考える幅が広がったといった記述があった。

グループ05は「回復」「関わり」「治療」「ケア」「気づく」「人間」「社会」「役割」「強い」「働く」「異なる」で構成された。KWICでは、看護の制度を知ること「働く」上で重要だと「気づいた」こと、患者が「治療」による「回復」の進みが遅いことで不安が生じる場合があるとは考えたこともなかったこと、患者の「社会」的背景「役割」が患者個人で全く「異なる」ことをふまえて「働く」ことが重要と気づいたといった記述があった。

V. 考察

1. 学生の看護観

非対面で看護学概論を受講した看護基礎教育初年度の学生が形成した看護観は【患者と家族に寄り添い医療・看護を提供する】【患者と家族の不安を和らげ信頼関係を構築する】【正確な知識・技術を身につけ患者の安心に繋げる】【生活に合わせた健康・回復へのサポート】【行動に常に責任を持つ】【的確な観察と対応】【少しの変化に気づき必要な看護を提供する】【相手の立場を理解し看護を実践する】の8つのグループが示された。

1) 学生が大切にしたい看護

【患者と家族に寄り添い医療・看護を提供する】【患者と家族の不安を和らげ信頼関係を構築する】【生活に合わせた健康・回復へのサポート】【相手の立場を理解し看護を実践する】では、学生が患者と家族に看護を提供する際、大切にしたいと考えた看護を示していると推察される。看護の対象は患者だけではなく家族も含まれており、患者のみならず家族との信頼関係を構築することが考え

られていた。また、不安を解消するための手段としてコミュニケーションをとることの大切さや対象の具体的なニーズを知る必要があると考えていた。コミュニケーションは看護にとって不可欠であり、看護の役割を学び看護者への自覚を高める(野村ら、1991)。非対面授業の中で他者との関わりが希薄になりやすい状況下においてもコミュニケーションについて着目できたことは、看護学概論を学ぶうえで看護の本質の理解に繋がったといえる。また、当該グループに含まれる抽出語とそのJaccard係数は『関係一築く0.46』『関係一信頼0.47』において強い関連が示されたことや「関係」「信頼」は頻出語50語に含まれていることから、信頼関係を築く大切さが強く認識できたと考える。

2) 大切な看護のために行う自身の行動

【正確な知識・技術を身につけ患者の安心に繋げる】【少しの変化に気づき必要な看護を提供する】【行動に常に責任を持つ】【的確な観察と対応】では、学生が大切にしたい看護を提供するために行う自身の行動を示していると推察される。患者と家族に安心されるためには知識や技術を修得するだけではなく学習を継続することや、行動には自ら責任を持つ必要性が考えられていた。また、常に対象のニーズを把握し必要な看護を的確に提供することを怠らないと考えていた。看護基礎教育では、学士課程教育のコアとなる看護実践能力の一つとして、看護学を構成する概念である人間、環境、健康、看護の理解を基盤として、課題解決技法等の基本を踏まえて、看護の対象となる人のニーズに合わせた看護を展開(実践)する能力を育成する教授を重要視している(文部科学省、2017)。学生は、看護の対象となる患者と家族のニーズに合わせた看護を行うことと、そのための能力を養う必要性について捉えていたと考える。

2. 看護観に影響を受けたこと

看護観に影響を受けた講義内容は5つのグループが示され、中心性の高い抽出語は「先生」「お話」「スキル」「患者」であった。

グループ01に含まれる抽出語のKWICより学生は、看護の対象は患者だけではなく家族も含むこと、看護の歴史や法制度の知識を得て看護への認識が変化したことを捉えていた。このような認識の変化から、教育内容を吟味することで非対面下の学習においても看護学の本質を理解し関心を高める学習効果が得られると考えられた。

グループ02は教員の臨床体験動画が学生の看護観に影響を与えたことを示している。共起ネットワーク媒介中心性においても「先生」「お話」「スキル」「患者」は中心性が高いことから、教員の臨床体験は看護学概論での学生の学びを裏付けしただけでなく、修得知識や技術を維持し続け、看護は患者主体に考えるという看護学生としての今後の学習への示唆に富む内容であったことがうかがえた。臨床における先輩看護師の経験学習を言語化し学生に語り聴かせることは、看護師を目指す学生においては生きた学びになり、看護師モデルになる(田村、2013)。学生は教員の体験談に将来の自分を重ねていたと推察される。本研究を進めるにあたり、基礎調査として学生の入学直後に捉えている看護を明らかにした。学生が捉える看護は、自身や家族の経験をもとに主に療養上の世話や診療の補助に該当する内容であり、これまでの経験を整理し実際の看護と学習内容の結びつきが必要であると示唆された(丹下・山口・上原・近藤・小林、2021)。看護教員に求められることは看護職の職務内容や多岐に渡る看護職のキャリアデザインの現状について学生に情報提供し、明確な目的意識・覚悟を持ち学習に望めるように支援していくことである(牟田、2018)。座学による知識の付与に加え、実際の看護を行う場面の体験談を動画教材で提供したことは学生の学習を整理し看護観の形成に寄与したと考える。

グループ03,04,05は看護学概論の学習項目である看護倫理・理論、看護モデル、理論家について形成されたグループである。看護職は看護を実践する過程において、患者の価値や背景を考慮に入れながら、倫理原則や倫理綱領を基本にして、最善の方法を見出すよう努める。また、看護理論

は、看護学生時代に看護とは何かという看護の本質的理解のために活用される(田中、2022)。患者個々の社会的背景・役割に応じてニーズに答えていく必要があることや様々な看護理論から看護を考える幅が広がったと捉えられたことは看護への理解を深める第一歩になったと考えられる。

看護学生の看護観を明確化することはその後の学生自らの学習意欲の推進につながるため重要である(青木・佐々木、2019)。看護基礎教育初年度の学生にとって非対面学習環境の中でどのような看護観が形成されるのか、また、教員は対面授業と同様に看護観形成を支援できるのか懸念された。しかし教員の臨床体験や看護学として専門的な知識を学ぶ事により、学生が入学時に看護として捉えていた療養上の世話や診療の補助といった内容は、患者や家族を主体に、信頼関係を基盤とした健康回復支援を考え提供する看護へと変化していた。さらに看護を提供するための自己研鑽にまで意識が及んでいることが確認された。何より学生自らが変化したことを自覚し看護観を明確化できたことは、学習への動機づけとなった。

非対面授業では学生の反応を直接確認しながら講義を進めることが困難であると考え、受講ごとに振り返りレポートを課題として学生の反応を把握し、教員がフィードバックすることでコミュニケーションを図った。その結果、学生が学習内容を整理・言語化することを繰り返すことになり、非対面であっても看護学の本質の理解や看護観の形成を促したと考える。また、教員の臨床経験を活かした話題の提供は看護学教育導入時期の学生の看護に対する理解を広げ、関心を高める効果が得られたと考える。対面授業の場合でも、言語化の繰り返しや臨床経験を活かした話題提供ができる授業運営を継続したい。

3. 本研究の限界と課題

本研究は、テキストマイニングの特徴である出現頻度の高さや語句間の関係性に注目して学生の看護観や影響要因を明らかにしたが、今後は出現頻度の低い語の文脈も含めた分析を行い、学生の

表現の多様性を鑑みたデータ分析を積み重ねていきたい。また、本研究の知見をもとにした教授方法や教育内容を具現化することが課題である。

VI. 結論

非対面で看護学概論を受講した看護基礎教育初年度の学生が形成した看護観と、看護観の形成に影響した講義の内容をテキストマイニングで分析した。看護観は【患者と家族に寄り添い医療・看護を提供する】【患者と家族の不安を和らげ信頼関係を構築する】【正確な知識・技術を身につけ患者の安心に繋げる】【生活に合わせた健康・回復へのサポート】【行動に常に責任を持つ】【的確な観察と対応】【少しの変化に気づき必要な看護を提供する】【相手の立場を理解し看護を実践する】の8つが抽出された。影響を受けた講義内容は、教員の臨床体験動画、看護倫理や看護の法制度など看護の専門的な知識を学習したことであった。特に教員の臨床体験は、修得した知識やスキルを維持し続けることの重要性や患者主体の看護を強く認識していることがうかがえた。

利益相反:本研究における利益相反は存在しない。

文献

- 青木亜砂子, 佐々木律子. (2019). 看護学生の看護観の形成に関する文献検討. 北海道文教大学研究紀要, (43), 107-115.
- 長谷川真美, 鶴田晴美, 中村昌子, 熊谷玲子, 吉岡栄子, 大澤久美枝, 奥井鈴江. (2015). 基礎教育における看護観形成に関する研究—基礎看護学実習Ⅱ前後の看護のイメージの変化—. 東都医療大学紀要, 5(1), 31-40.
- 樋口耕一. (2020). 社会調査のための計量テキスト分析第2版. 京都: ナカニシヤ出版.
- 伊丹君和, 鈴木絵夢, 高見紀江, 豊田久美子, 久留島美紀子, 本田可奈子, 遠藤美和子. (2008). 未来看護塾の活動および人と関わる体験が看護学生へもたらす効果. 人間看護学研究, 6, 49-61.
- 木村裕美子, 三上れつ. (2018). 看護学生の看護観の変化—入学当初と看護見学実習後の比較—. 生命健康科学研究所紀要, 15, 56-64.
- 文部科学省. (2017). 看護学教育モデル・コア・カリキュラム「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した目標. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/index.htm. 2022/10/11閲覧
- 牟田京子. (2018). 大学におけるキャリア教育の教育評価～ナラティブ聴講における意識変容に着目して～. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 22, 6-12.
- 野村志保子, 山口瑞穂子, 村上みち子, 鈴木淳子, 工藤綾子, 服部恵子. (1991). 基礎看護実習Ⅰにおける学生の学び. 順天堂大学医療短期大学紀要, 2, 1-16.
- 小野淳二, 二重作清子, 古庄夏香, 能登裕子, 永田華千代. (2013). 入学直後の看護大学生における看護に対するとらえ方. 純真学園大学雑誌, 2, 89-92.
- 志自岐康子, 松尾ミヨ子, 習田明裕, 金壽子. (2017). ナーシング・グラフィカ基礎看護学①看護学概論. 大阪: メディカ出版. 3-4.
- 末吉美喜. (2020). テキストマイニング入門 Excel と KH Coder でわかるデータ分析. 東京: オーム社.
- 田中幸子. (2022). 看護学概論 看護迫及へのアプローチ. 東京: 医歯薬出版株式会社.
- 丹下めぐみ, 山口大輔, 上原文恵, 近藤大稀, 小林千世. (2021). リモート授業を受ける学生の看護観形成に関する Text Mining を用いた基礎調査. 第40回長野県看護研究会論文集, 8-11.
- 田村美子. (2013). 看護師長の語りによる学生のケアリング体験—ケアリング教育の具現化—. キャリアと看護研究, 13(1), 115-123.
- 鳥越ゆい子, 小湊真衣, 望月崇博, 青木直樹. (2021). 現代学生のコロナ禍における非対面授業への意識—対面授業と非対面授業それぞれのよさ—. 帝京科学大学紀要, 17, 145-151.

Abstract

This study was conducted to determine the philosophy of nursing formed by students in their first year of basic nursing education after completing a non-face-to-face “Introduction to Nursing” class, and to determine the lecture content that influenced the formation of that philosophy. Using text mining to analyze data from 69 students, eight nursing philosophies were extracted: “Provide medical and nursing care that is close to patients and their families,” “Ease patient and family concerns and build trust,” “Acquire accurate knowledge and skills to reassure patients,” “Support health and recovery in accordance with daily life,” “Always take responsibility for actions,” “Make accurate observations and provide appropriate responses,” “Notice small changes and provide the necessary nursing care,” and “Practice nursing with an understanding of others’ perspectives.” Lecture content that influenced students was videos of faculty members’ clinical experiences and classes on professional knowledge such as nursing ethics and nursing related laws and regulations. Faculty members’ clinical experiences specifically highlighted a strong student awareness of the importance of retaining acquired knowledge and skills, and of patient-centered nursing.